

水木 楊

ジュールス国脱出記



新潮社

新潮社

PLUS is an arc of many islands. Main urban area is Askana City.

ニールス国脱出記 水木 楊

High-tech Sectors Experiencing a General Rise in the Level of Technology.

New Materials; High-molecular separation film Electronics; Semiconductor memory chips.

Technology; Utilizing microorganisms

Aeronautical / space; Communications satellites



ジュールス国脱出記 こくだつしゅつぎ

■著者紹介

一九三七年上海生まれ。本名・市岡揚一郎。自由学園最高学部卒。六〇年日本経済新聞社入社。七一年ロンドン特派員、八一年ワシントン支局長。国際総部長を経て、現在、論説副主幹。著書に『予算は誰のものか』『ケチの文化論』『ザ・デイク——日本がアメリカを追い越す日』『アメリカ100年の旅——新米欧回覧実記』『短現の研究——日本を動かす海軍エリート』（新潮社刊）がある。一九八八年八月に水木楊の名前で『1999年、日本再占領』（新潮社刊）を発表、優れた国際政治小説として高く評価された。本書は、水木楊として第二作目にあたる近未来小説だが、現在次なる野心作を執筆中である。

印刷——一九九〇年一月二〇日

発行——一九九〇年一月二五日

著者——みずき しょう 水木楊

発行者——佐藤亮一

発行所——株式会社新潮社

所在地——162 東京都新宿区矢来町七一

電話——業務部(03)二六六—五一二
編集部(03)二六六—五四・一

振替——東京四—八〇八

印刷所——錦明印刷株式会社

製本所——株式会社大進堂

© Yo Mizuki 1990, Printed in Japan

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-366303-0 C0093

価格はカバーに表示してあります。

ジールス国脱出記
* 目次

第1章 探検

1	ジールス・ウォール	7
2	首都アスカナ	16
3	ペラ疑惑	37
4	役人ユズラノフ	43
5	大陸棚工場	49
6	マリナの裸	65
7	ビトンダ	72
8	キキのプレゼント	80
9	希望の闇	87
10	焦り	105

第2章 発見

1	パレード	112
2	法コン	125
3	新聞社のシステム	130
4	ホームステイ	147

第3章 逃亡

5 キーワード発見 175

1 マリナの誘惑 194

2 ベラとの約束 210

3 苦手の男 225

4 本当のような嘘 238

5 少女ジヨリの精 249

6 ベドウィン 260

7 オメオメ現象 271

8 危機一髪 281

第4章 トピア島

1 生き返った祖父 307

2 さらに、ジールス 316

作者あとがき 330

装画 * 小竹信節

ジールス国脱出記

第1章 探検

1 ジールス・ウォール

取材対象に心を奪われてしまつて良い結果になつたことはない。どんなに魅力的で非の打ちどころのないように見える取材対象でも、原稿を書くときは褒める部分をせいぜい七割くらいに止めておく。残り三割は欠点や問題点を探す——先輩から後輩に繰り返し言い伝えられてきた「褒め七、けなし三の原則」だつた。記事の彫りを深くするテクニクのためだけではなく、ジャーナリストに欠かすことのできない醒めた目を保つための知恵でもある。そんなことは百も承知だったが、物事はそう理屈通りにはいきはしない。あの時の私がベテラン記者にはあるまじき取り乱しようだつたからといって誰が責めることができるか。

その日の夕方、机の上に足を乗せライバル紙の夕刊をめぐっていたら、いきなり肩を叩かれた。振り返ると、そこに編集局長が立っていた。私は反射的に足を下ろしゼンマイ仕掛けの人形のようになり上がった。べつに坐つたままでもいいのだが、この女編集局長にはどうしてもこうした反応になってしまう。

「ちょっと」と言つて歩き出した彼女の後を追いはしたが、編集局の一角にある編集局長室に入

るまで一定の距離を保って歩いた。さもないと彼女の体臭と香水の入り交じった、果物の腐りかけたような、強烈な匂いのパンチを受けて頭の芯がだんだん麻痺し、彼女の命令にはいかなることであっても従わざるを得ないような気分になってしまふ。彼女はつねに匂いという透明の立方体の中央に存在し、彼女とともにその立方体も移動しているようなもので、その透明の壁の中で寝食を共にしている人がいるなどということは想像をはるかに越えることだった。一度、あるパーティーに彼女の夫が姿を現した。背の低い、禿げかかった貧相な男をみて、みななぜかほっと安心したような気分になり「夫婦というものは足して二で割ると平均体重はみな同じになるのか」などと陰口を叩き合ったものだが、私にはむしろ、その夫が心の広い、真のボランテアであるかのように思えた。

局長室のブースに入ると、彼女は机の向こうからこちらに向き直り、

「ニュース……いいニュースよ」と告げた。

また一見美味しそうでいて実は面倒な取材を押しつけられるのではあるまいかと疑ってソバカスだらけの彼女の顔を見上げると、彼女は思わせ振りに片目をつぶってみせた。

「ジールス。どうお？ とれたのよ、取材許可が。三週間……」

しばらくの沈黙があった。私はその時、間拔けな顔で突っ立っていたに違いない。

「ジールス？ 本当に行けるんですか？」

彼女は私の手応えを楽しむかのように微笑んで、「あなたの都合がよければね」と言葉を切った。

「都合がいいって……もちろんです。オーケーです。大丈夫です」

「じゃあ、できるだけ早く手続きをとって。あの国の役人の気の変わらぬうちにね。記事は八月

の創刊五十周年記念特集に間に合わせたいから」

私は「ありがとうございます」というのも忘れ、編集局長の部屋を飛び出した。出るとき誰かにぶつかったような気がしたが、誰だったかは覚えてもない。寒いような興奮が体を包んでいた。

局長室を飛び出した私の行く先は決まっていた。自宅である。一刻も早くこの吉報を妻に知らせたい。人類のあらゆる可能性を実現していく夢の国、ジールス……。

自宅はネディ河を北上した対岸の郊外地にある。ネディ河は大都市に流れる河としては汚染されておらず、いまでもシーバスや鮭が上ってくる。毎年五月になれば、河一杯に鯀が溢れて採りきれないほどになる。

わがボンコツ車のデルタ・クーペは河畔を疾走する。リガ国、とりわけネディの位置する東部の夏は空気が澄み、晴朗な夕暮れを迎える。夕刻六時——この時間には河は斜光線を受け一面の銀鱗のようになる。いつもなら近くのバブによってビルで喉を潤すか、スポーツ・クラブでスクワッシュのひと汗を流すか、それとも自宅に直行して森に散歩に出掛けるか……夕食前のひとときをどのように過ごすかを迷う、心楽しい瞬間が訪れるのだが、今日は違う。ひたすらまっしぐら。ハンドルは自分でしかと握っている。

我が愛車は自動運転もできるロボットなのだが、残念ながらリガ製である。居眠りをして目を覚ましたら、恐ろしい貧民窟のど真ん中で停車していたことがあった。ボロをまとったアル中の大群が窓を叩く。手に手に汚い布切れを持ち、ガラスを磨いてチップを掠めとろうという算段だ。そんな布で拭かれたら、窓は曇りガラスになってしまふ。けたたましくクラクションを鳴らし、やっと脱出したが、あれ以来、自動運転はなるべくしないことにした。彼らのアル中振りは鬼気

迫るものがあり、震えの止まらぬ手首をネクタイでひと巻、いったん固定してから目の前のグラスを掴んで口に運ぶ。

オフイスから四十分、緑に包まれた丘陵地帯が住宅地だ。我が家は急坂の上にあり、雪が降ったり、寒さで道路が凍ったりすると、車輪が空転して登りきれなくなる。しかし、夏の間は我がポンコツも調子がいい。とりわけ今日は一気に我が家の前庭まで駆け上がった。

撒水機が四方に小さな虹を掛け、その中に息子の姿がある。芝生の手入れは彼の仕事で、よく体の動くところがいい。白人の妻との間に出来た子だが、肌は私と同じ褐色。ただ、目は青みがかった。中肉中背、筋肉質。フランスの俳優にこんなのがいた。女の子からよく電話が掛かってくるのはいいが、問題は勉強だ。べつに頭が悪いわけではない。リガ国東部の水泳選手権に出場したために練習にうつつをぬかしているだけだ。

息子の側で虹にじゃれついていたサブが、私を見つけて飛んでくる。リモコンで車庫に車を入れたとたんに足に絡みついた。サブはミュー種でジールスが原産地の犬である。

「サブ！ 駄目。こっちにいらつしやい」

エプロン姿の妻が玄関から出てきた。身長は百六十八センチ。私よりもやや低く、体重は重い。大学時代、知り合った当時はもつとほっそりしていて、肌は蠟のように半透明であくまでも白く、ブルーネットの天使だった。だが、三十を越してから変化が起き、いまは腹部から腰に掛けてふてぶてしいような脂肪がついてしまった。この脂肪の厚みを垣間見ると、憎々しくなるときもあれば、なんとなく物哀しくなることもある。しかし、あの編集局長に比べれば、その重量感、迫力においてはカバとコアラくらいの差がある。私はあの貧相な夫のようにまだボランテニア活動には入っていない、と思いたかった。

「サブ……駄目じゃないの……こっちに来て」妻が声を荒立てる。サブの足についた泥で私のズボンが汚れることを嫌がっているのだ。サブはミューらしくなく、人なつっこい犬で、構ってやろうものなら嬉しがって粗相してしまうこともあった。

「早かったのね」玄関に入ると妻は肩に手を回してキスを求めてきた。ねっとり舌を絡ませてくるときは、今夜の行事を求めるシグナルだ。今日はあつさりしている。今夜は調べものが一杯あるから、その方がこっちはありがたい。

「今日はいいいニュースがある。ジールスに行けることになった」

「ジールスに？ 取材？」

「入国ビザが出る」

「よかったわね……」妻は私の目の奥を覗き込むようにした。彼女は私のジールス狂いをときどきからかう。私と息子にジールス人の血が流れていて、黙っていても通じ合う雰囲気を感じるときには焼き餅を焼くこともあるほどだ。

「いつから」

「まだ日程は決まってない。これからジールスの領事館と詰めるんだ」

「なんだか心配ね」

「どうして」

「遠い国だわ。あんまり新聞記者の行かないところでしょ」

「大丈夫、我がマザーランドだから……お土産を沢山買ってきてあげるよ」

妻は私に大きなチャンスの訪れたことを喜んでくれたが、なぜか少し浮かぬ顔もしていた。

その夜、妻は教会の寄り合いに、息子は水泳の練習に出掛けた。私は大豆を醗酵させてペーストにしたものをお湯に溶かしたインスタントスープを出して、お茶代わりにすすりながら書斎のCATVの前にいそいそと坐る。妻はこの匂いが嫌いだから、彼女のいないときがチャンスだ。会社の資料室のデータバンクを呼び、自分の頭の中にすでにぎっしり詰まっている材料を確認するとともに補強する作業に没頭する……。

ジールス国。人口一億三千二百万人。世界の総人口の二%強。だが、GNP（国民総生産）では三〇%を占める。一人当たりのGNPでも文句なしの世界一で七万三千SDR（IMF「国際通貨基金の特別引き出し権」）。二位の私の国の五万二千SDRを遙かに引き離す。

一九八〇年代から二十一世紀初頭にかけて先進各国は「新産業革命」ともいうべき時代に突入、コンピューター、通信、情報、バイオ、素材、光ファイバーなど広範囲な分野のニュー・テクノロジーがビジネス社会や市民生活を変えていった。各国は新しいテクノロジーの市民生活にもたらす弊害に脅えながら、一方でお互いに負けまいと歯を食いしばってこの時代を乗り切ろうとしたのだが、その中でもいともしなやかに、何気なくといっていいほどの、軽やかな歩調で、ひと足早く二十一世紀の産業社会を実現してしまったのがこの国である。

ジールス国が二十一世紀への入り口をくぐり抜けながら、いち早く実用化したテクノロジーのリストは例えば以下の通りだ。

「推論機能を持つ第五世代コンピューター、六カ国語以上翻訳でき音声入力可能な自動翻訳機、超薄型壁掛けテレビ、高効率大面積太陽電池、細胞融合による作物の育種、深海底鉱物資源の採取、蛋白質・生理活性物質を分離する高分子膜、1ギガビットメモリ加工、癌の五年以上平均生

存率八〇%の達成……」

いまや各国の経営者や技術者はこの国から新技術の特許やノウハウを買おうとして連日、オフィスや研究所詣でを繰り返しており、ジールスの首都アスカナは榮華をきわめた唐時代の中国の国際都市にちなんで、「二十一世紀の長安」と言われるほどになった。

対外関係を見ると、この国の経常収支はわずか八十億SDRの黒字を計上するのみで、貿易収支の若干の赤字を外国からの特許使用料や技術指導料の黒字が埋めたうえで少しおつりが出る姿になっている。

この国は地球上に無限にある水素をエネルギーに転化する技術により、まず石油の輸入を止め原子力発電を全廃してしまった。二十一世紀初頭に核融合の人工点火条件を実現、つまり人工的に太陽の核反応現象を産み出す画期的な一步を踏み出し、現在は供給用電力を作るまでになっている。南太平洋上に太陽光発電パネルを浮かべ海水を電気分解して水素を分離するという大掛かりなプロジェクトも国ぐるみで推進した。つぎにこの新エネルギーと太陽熱の有効活用により農業は工業化してアグリビジネスとなり農地は大幅に減少した。食料の大部分はバイオテクノロジーとマイコンを駆使した、透明な高層建築の植物工場で生産されるようになっていた。水産業も九〇%は海中工場で営まれ、食料の輸入はごくわずかな量になってしまったのだった。

輸入の必要がなければ、輸出して外貨を稼がなくてもいい。ダイナミックな技術開発はこの国を外的な要因から影響されるところの少ない、外との関わりをあえて求める必要のない自給国家としている。

首都アスカナは確かに「二十一世紀の長安」であり、各国からの経営者や技術者の来訪で賑わっているが、大きく異なっている点があった。それはジールスに入国できるのは当局の許可を

得た人間だけで、海外からの無線による情報アクセスをほぼ完全に遮断していたことだ。国境周辺に千キロワットの電磁波による壁をめぐらすとともに、静止衛星数個による電波妨害によって上空からの情報アクセスを防いでいた。海外ではこの情報遮断を苦笑まじりに「ジールス・ウォール」と呼んだ。ジールスとの情報交換は海底を走るケーブルか、あるいは特別の周波数を持つ無線に限られていたのだ。

ジールスが訪問客を除いて外国人の移住を認めず、情報の交流をも遮断する「鎖国」になったのは二〇二一年のことだった。それまでのジールスは土木工事や清掃などの肉体労働、飲食店におけるサービスなどの分野で沢山の外国人労働力を輸入していたが、ジールス人と彼らとの生活格差はなかなか縮小せず、外国人労働者による犯罪は増加の一途を辿った。

決定的事件は二〇一八年の暑い夏に起きた。外国人労働者の不穏分子は彼らに同情的な国会議員の協力を得て議事堂に小型原子爆弾を搬入、議会をハイジャックしてジールス南端からペイ島北東端にいたる約千二百キロの海上に列なる群島のうち三十の領有を要求、世間を震撼させた。

精強で鳴るジールス警視庁第十二機動隊は一瞬のうちに最長百三十五メートルに達するレーザー銃を用いてこのテロリスト全員の命を奪い、事件は解決したが、これが導火線となって全国に外国人労働者の排斥運動が火を吹き、大衆リンチによる虐殺事件も多発した。

この様子を外国メディアは生々しく報道し、ジールスは国際世論の厳しい批判の矢面に立たされた。

ジールスが三年という猶予期間を区切って全ての外国人労働者に国外退去を命じたのは、そのときである。同時に情報遮断のために「ジールス・ウォール」を張りめぐらした。

外国人労働者の代役を務めたのはロボットである。一台当たりのコストは外国人よりも高くつ